

子どもの生活と保育内容「環境」とのつながりについての一考察
- 幼児の園での生活と遊びから“生活科”も視野に入れて -

長谷 秀揮
四條畷学園短期大学

A Study on the Connection between Children's Life and Childcare Contents “Environment”
- From the life and play in infant's garden “Life course” is also in view -

Hideki Hase
Shijonawate Gakuen Junior College

子どもの生活と保育内容「環境」とのつながりについての一考察
 - 幼児の園での生活と遊びから“生活科”も視野に入れて -

長谷 秀揮*

A Study on the Connection between Children's Life and Childcare Contents “Environment”
 - From the life and play in infant's garden “Life course” is also in view -

Hideki Hase

本稿では子どもが日々通い保育者や友だちと過ごす保育所や幼稚園、そして認定こども園での幼児の生活や遊び等の諸活動を捉え直して保育内容 領域「環境」との繋がりについて考察を加えた。また園での飼育栽培活動に着目し保育内容 領域「環境」との関連や繋がりについて整理して考察を加え、生活科も視野に入れながら課題等を探った。また保育者として自然環境を重要視することの必要性や保育、教育の実践における子どもと自然との関わりに関する留意事項等を整理した。さらに保育を学ぶ学生の自然体験に関する質問紙調査の結果を踏まえ生活科に繋がる領域「環境」についての学生に対する教授及び指導のより良い在り方や授業の課題等を探った。結果、領域「環境」では自然が最も重要視されていることを確認でき、園での飼育栽培活動が子どもの健やかな成長発達に繋がる意義深い取り組みとなってきたことが判った。また質問紙調査の結果から、学生が飼育栽培活動における子どもへの配慮や援助について重視していることが明らかになった。そして乳幼児が園などで自然環境との触れ合いを通して直接体験する内容や環境教育に関わって保育者や教師の果たす役割が大きく重要となることが分かった。

Key words: 保育内容「環境」、生活と遊び、飼育栽培活動、生活科、自然体験、環境教育

1. はじめに

保育内容・領域「環境」については、本学では保育学科の1年生の前期に保育士資格と幼稚園2種免許の両方の必修科目として開講され重視されている。それは、保育内容の「環境」、「健康」、「人間関係」、「言葉」、「表現」の5領域であり保育、幼児教育において最も重要でコアな部分であり、そして、それゆえ保育、幼児教育の現場における日々の実践とその具体的な中身に直結している為である。

乳幼児の保育、幼児教育における子どもの成長発達に大きく関わる子どもの身近な環境については、①人的環境 ②物的環境 ③自然環境 ④社会的環境（場の雰囲気を含む）が挙げられる。これらの環境はそれぞれ個別に、そして相互に、また複合的に関連しあって子どもに関わり作用していく

といえる。また、子どもの側からのそれらの身近な環境に対する働きかけや能動的な関わりにより、主体である子どもと環境との相互作用が生まれ、子どもの成長発達に必要な経験や学習が得られていくことに繋がっていくのである。

①人的環境については、園の保育者や友だちや園長先生や他の職員の方たち、そして保護者の方々といった人たちが考えられる。他の環境も、もちろん、子どもにとってそれぞれが大きな意義を持つ重要な環境であるが、その中でもとりわけ人的環境は、乳幼児期の子どもにとって重要な環境であり、最も大きな影響力を持つと言っても過言ではないといえる。

②物的環境については、保育室や園舎、園庭や固定遊具、遊具や玩具、その他、というような子どもに身近な建物や設備、様々な備品や保育教材、遊具や玩具、生活用品などが挙げられる。乳幼児期の子どもにとって、衛生的で十分に配慮の行き

* 四條畷学園短期大学 保育学科

届いた身の回りの物的な環境は、健やかな成長発達にとって、不可欠であるといえる。

③自然環境については、太陽光、雨、風、等の自然現象も含まれるが、子どもにとっては何と言っても飼育小動物や草花、野菜や樹木などのいわゆる飼育栽培物が、身近で影響力があるといえる。保育所でも幼稚園でも、また認定こども園においても、つまり全ての園において、子どもたちは幼児組になると飼育栽培活動に取り組むことになる。この飼育栽培活動は、小学校においても取り組まれていて、授業では生活科や理科などに繋がり、子どもの自然体験を豊かなものとしている。

④社会的環境は、子どもの身近な「場」の雰囲気や社会事象も環境として捉えられることが、最近では一般的になって来ている。つまり保育所や幼稚園などの園や家庭学校や地域社会といったような、子どもが生活し遊び、そして学び、またさまざまな経験を重ねていく場の雰囲気や、社会の出来事も含め子どもの成長発達に関わり大きく影響するということが言われているのである。例えば、温かいまなざしが見守る雰囲気の中で、生活し育つ環境と、それとも冷たく殺伐とした雰囲気の中で生活し育つ環境とを、仮定として比較して考える時、どちらの方が子どもの成長発達にとってより良い環境であるのか、と問われればその答えは明々白々であるといえる。

子どもの成長発達と生活や遊び、また子どもを取り巻く諸環境についての今日的な問題意識を挙げれば、保育内容「環境」に関しては、特に自然環境の意義や役割を取り立てて捉え直して、最近の知見や環境問題も視野に入れて、整理して考察に繋げていくことが喫緊の課題であると考えている。その理由は、問題意識に関連することであるが現代社会の子どもの生活の問題点や課題の一つに、身近な自然環境の減少もしくは消失による、日常的な自然との関わりの貧弱化、もしくは貧困化が挙げられると考えるからである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子どもが日々通い保育者や友だちと過ごす保育所や幼稚園、そして認定こども園での生活や遊び、またそこから発展させていく諸活動を捉え直し、子どもの生活と保育内容 領域

「環境」の関連やつながり及び、課題等について考察を加えようとするものである。具体的には保育所や幼稚園認定こども園などで実際に行なわれている飼育栽培活動に着目して、子どもの園での生活と保育内容「環境」との関連やつながりについて整理及び分析して考察を加え、生活科も視野に入れながら課題等を探ることである。そしてまた保育者として、生活や遊びにおいて自然環境を重要視することの必要性や、保育、教育実践における子どもと自然との関わりに関する配慮や留意事項等を整理したいと考える。また、そのことを通して保育を学ぶ学生の自然体験に関する質問紙調査の結果も参考にして、生活科に繋がる保育内容領域「環境」についての学生に対する教授及び指導のより良い在り方に繋げることに資することである。

3. 保育内容 領域「環境」について

[1] 保育内容 領域「環境」

平成 29 年 3 月に告示された、新しい保育所保育指針¹⁾と幼稚園教育要領²⁾、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領³⁾において、3 歳以上の幼児については全て共通の記述及び取り扱いとなっているが、保育内容 領域「環境」は、保育内容の 5 領域（健康・人間関係・言葉・環境・表現）のなかの 1 つであり、

「身近な環境との関わりに関する領域」とされている。そのねらいについては、[周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う]を領域の全体的なねらいとし、そして具体的な「ねらい」として次の 3 つを挙げている。

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味関心を持つ。
- (2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れてようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

また、「内容」については、同じく 3 歳以上の幼児について共通として、

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。

- (2) 生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化があることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
- (7) 身近なものを大切にすること。
- (8) 身近なものや遊具に興味を持って関わり、自分なりに比べたり関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (9) 日常生活の中で数量や図形等に関心を持つ
- (10) 日常生活の中で、簡単な標識や文字などに関心を持つ。
- (11) 生活に関係の深い施設や情報に興味や関心を持つ。
- (12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

以上の12の内容を挙げている。⁴⁾

[2] 保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の記述から

上記のねらいと内容については、幼稚園教育要領から詳細を参照していくようにしたが、保育所保育指針では、3歳以上の幼児以外の年齢の子どもについては、「乳児保育に関するねらい及び内容」と、「1歳以上3歳未満児の保育に係わるねらい及び内容」の2つに分けて記述している。そして、ねらいを年齢区分に応じてそれぞれ3つずつ示し、また内容について前者は5つ、後者は7つ挙げている。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても保育所保育指針と同様に、1歳未満の乳児期の園児と、1歳以上3歳未満の園児の2つに分けて示されていて、それぞれの区分について、ねらい及び内容も保育所保育指針と全く同じ記述及び取り扱いに統一されている。

つまり3歳以上の幼児については、共通の記述及び取り扱いとなっていて、幼稚園教育要領と保育所保育指針、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領で示されているねらいと内容が、全

て共通であることは前述のとおりである。そしてまた、3歳未満の子ども、すなわち乳児クラスの子ども（＝0、1、2歳児組）については、幼保連携型認定こども園でも保育所でも、全く同一のねらいと内容とされていることがわかる。

以上のように、保育内容領域「環境」について捉え直して整理したが、環境を含む5つの領域全てにおいて、この環境の領域と全く同様になっているのである。つまり3歳以上の幼児については保育所保育指針と幼稚園教育要領、また幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、「ねらい」と「内容」を全て共通としているのである。

この度、教育改革の一連の流れの中で改定され、平成29年3月に告示された保育所保育指針と幼稚園教育要領、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領により、子どもたちが通う保育所と幼稚園、そして幼保連携型認定こども園において、全ての園の保育内容が同じものに統一され、従って全ての園に通う幼児が受ける保育、幼児教育の内容が実質的にも名目的にも同一になり、共通のものとなったといえる。

4. 自然と保育、幼児教育及び生活科について

[1] 保育内容領域「環境」と自然

保育内容領域「環境」においては、環境と自然との関わりや結びつきについては、まず保育内容領域「環境」のねらいが3つ挙げられている中で、その最初に「自然と触れ合う中で様々な事象に興味関心を持つ。」と、述べられていて自然との触れ合いがねらいの一番最初に挙げられている、という点に着目することができる。つまり保育内容領域「環境」においては自然環境を最重要視していることがここから読み取れる。そして、そのことは内容からも同様に読み取ることができる。

すなわち内容については、次のように(1)、(3)(4)、(5)の4つの項目で自然環境、及び飼育栽培に関する記述がある。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化があることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみを持って接し、生命の

尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

この4つの項目は、自然及び飼育栽培に関する内容であるが、合計12項目ある中で最初に挙げられている内容であること、また計4つで内容全体の3分の1を占めていること等から、ねらいと全く同様に、保育内容領域「環境」においては自然について重視されていることが分かる。

その理由の最も大きなものとして、子どもの発達成長における自然環境の持つ様々な影響力が挙げられる。そしてその背景としては、都市部における自然環境の減少、もしくは喪失が顕著であることが考えられる。つまり保育内容は、保育所と幼稚園、そして幼保連携型認定こども園において、子どもが生活していく中で発達していく姿を踏まえて、園での保育、教育を通して園児に育つことが期待される心情、意欲、態度などを「ねらい」とし、またそのねらいを達成するために教諭や保育者が指導し園児が身につけていくことが望まれるものを「内容」としているのであるが、領域「環境」においては自然が最も重要視されているといえるのである。

なお、領域「環境」をはじめとする5つの領域は「ねらい」と、「内容」を子どもの発達の側面から捉えまとめて編成しているといえる。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説においては、このことについて、「園児の発達は様々な側面が絡みあって相互に影響を与えながら遂げられていくものである。各領域に示されている『ねらい』は、園生活の全体を通して園児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら、次第に達成に向かうものであり、『内容』は園児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されなければならないものである。」⁴⁾として、5つの領域に関するねらいの相互関連性と、「内容」の指導における総合性についての留意点及び配慮事項を示しているのである。

[2] 自然環境と子どもの成長発達

自然環境と現代の子どもの成長発達について考えると、まず大きな問題として「自然環境の貧困化」つまり子どもに身近な自然環境の減少や喪失が挙げられる。そしてその結果として、子どもの自然遊びの貧困化に繋がっている現状があり、また同

様に伝承的な自然遊びの機会の減少や喪失にも繋がっているといえる。

自然との関わりにより子どもは、生きる力の基礎を育み伸ばす、さまざまな経験を得ることができる。

特に、昨今においては自然と子どもの触れ合いやかかわりに関する教育的、心理的な側面についての研究が進み、いわゆる「自然遊び」は、子どもの体力や感性を育み培うことはもちろんのこと、集中力や想像力などの芽生えを育み培い、そして伸ばしていくことが明らかになってきている。そしてまた、レイチェル・カーソンが唱えた、「センス・オブ・ワンダー」⁵⁾、すなわち美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性、そして何故だろう？という心の動きや不思議がる心もちは、子どもの好奇心や探求心の芽生えや伸長に繋がっていくと考えられる。

平成11年6月に出された文部省の生涯学習審議会の答申では、『『チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと』、『太陽が昇るところや沈むところを見たこと』、『夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと』といった自然体験の度合いと、『友達が悪いことをしていたら、やめさせる』、『バスや電車で席をゆずる』といった道徳観・正義感の度合いを、それぞれ点数化してクロス集計したところ、『自然体験』が豊富な子どもほど、『道徳観・正義感』が身につけている傾向が見受けられました。』⁶⁾と、報告されている。

また、国立青少年教育振興機構による平成24年度の調査報告書によると、「自然体験や生活体験が豊富な青少年ほど、自己肯定感が高い傾向にある。自己肯定感の中でも特に、『体力には自信がある』については、自然体験や生活体験とより強い関係が見られる。これらは、どの学年においても、同様の傾向が見られる。」⁷⁾とし、自然体験と自己肯定感との関係にも相関関係があることを報告して、子どもの自然体験の大切さを強調しているのである。

そのような中で自然体験を重視する様々な保育及び教育実践が取り組まれ報告されてきている。そして当然の流れではあるが、日本においても各地で、「もりのようちえん」や、「里山保育」、のように、自然との関わりと自然遊びの充実を、教育方針や保育内容の第1に掲げた幼稚園や保育所、認定こども園等が次第に増えてきているのである。

[3] 実際の指導における留意事項や配慮点

保育所や幼稚園、そして幼保連携型認定こども園において日々実践される実際の保育、教育活動は、保育内容の5領域について、領域「環境」を含む5つの領域全てが一体的かつ総合的に遊びを通して取り組まれ、展開されていく。保育内容の5領域が、例えば学校教育のように各教科別に時間割で分けられて行われる授業で、それぞれの教科の内容を学習するという教科学習の形態とは異なるのである。つまり保育内容がバラバラに、また個別に保育、教育活動の実際の内容として組み込まれていくのではなく、幼児の遊びを通して総合的に指導することが肝要であり就学前の保育、教育の最大の特徴となっているのである。このことを幼稚園教育要領では、「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら時次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。」⁸⁾と、示しているのである。

例えば幼稚園で領域「環境」にかかわる遊びとして、冬に「氷づくり遊び」を5歳児クラスの子どもたちで共に取り組み楽しむ際には、具体的な指導における総合性の中身として次のようなことが考えられる。容器に入れた水を戸外の陽の当たらない物陰に置いたり、風通しの良いところを選んで容器を置いたりなどのような、領域「環境」に関わる側面だけではなく、友だちと話し合いをして場所を決めて置いたり、結果を比較したり（＝人間関係、言葉）、氷づくりに成功した友だちに、工夫したところやコツを教えてもらったり、それを絵や図で描き表したり（＝人間関係、言葉、表現）などして、一連の活動の中で「氷づくり遊び」を子どもたちは総合的に楽しむことが出来ると考えられる。つまり保育内容 領域「環境」を含む5つの領域は、幼児の発達の側面から示した指導の観点であるという捉え方であり、幼児の遊びや活動の指導や援助は氷づくり遊びにおいて、環境の側面のみを取り上げて指導及び援助するというのではなく、幼児の遊びや活動の総合性に基いて保育者や教師は指導及び援助することが求められるのである。

[4] 園における幼児の飼育栽培活動及び考察

①飼育と栽培について

保育所や幼稚園、そして認定こども園での飼育栽培活動とは、幼児の通う園における飼育活動の取り組みと栽培活動の取り組みの総称である。

まず飼育活動は、例えばメダカやカメ、鳥やウサギなどの小動物を園で飼い、主に幼児組の子どもたちが当番や輪番などで必要な水や餌、食物を与えたり小動物の生活に必要な世話をしたりして育てることである。その際、保育者の指導や援助も、子どもたちの状況に応じた形で適宜必要とされるのは当然のことだといえるが、年長組の子どもたちが卒園前に次の年長児に、つまり年中組のクラスの子どもたちに引継ぎをして飼育当番活動を次第にバトンタッチして、任せていくような実践を続けている園もある。

そして栽培活動は、同じく園においては主に幼児組の子どもたちが草花や樹木、そして野菜などの植物を、土づくりや水やり、また肥料やりや雑草取り、さらに咲き終わった花がら摘みなどを、目的意識的な活動として当番活動に位置付けて継続的に行うことである。もちろん小さな乳児組の1歳児や2歳児が、保育者と一緒に花や野菜に水やりをすることも広い意味においては栽培活動と呼ぶこともできる。しかし花を綺麗に多く咲かせる、野菜を育て収穫してクッキングをする、などの目的や見通しを持って、友だちと協働して取り組む活動である、という意味においては幼児組ならではの活動といえる。

②幼児にとっての意義

飼育活動や栽培活動は、子どもたちにとって自然との触れ合いのある生活を、園の中で保育者が行う環境構成及び、その再構成を通して子どもの興味関心を喚起するなどにより意図的に作り出すことであるといえる。言い換えれば、園において子どもたちが、保育者とそして友だちと一緒に飼育栽培活動に日々取り組むことは、自然体験を日常的に重ねることが出来る生活を、子どもたちが園で創り出すことに繋がっていくことである。それは、家庭や地域においては継続的な、また組織的な、さらには伝承的な教育面に配慮された取り組み及び、活動として実施することが、困難な状況にあるような現代社会であればあるほど、園での領域「環境」にかかわる内容として、重要

で意義深い取り組みとなるといえる。

このように、今日の日本社会における子どもたちの生活と環境を考えると、日常的に自然に触れ親しむことができ、そして身近な自然環境に関わることでできる活動として、また当番活動や協同の活動を通して自然環境に慣れ親しむ中で、友だちや保育者と発見や感動、驚きなどを共有することが出来る活動として、ますます園での飼育栽培活動が子どもの健やかな成長発達に繋がるとても重要で大きな意義のある取り組みとなってきたのではないかと考えられる。

[5] 保育、幼児教育と生活科の繋がり

また保育、幼児教育の場での飼育栽培活動は、小学校での生活科や総合学習にも継承されて繋がりがそしてさらに深まり発展していくと考えられる。具体的には、例えば校内の畑での玉ねぎやジャガイモなどの農作物の栽培や、その収穫物を使ってのカレーライスなどの料理づくり（クッキング）の取り組み、自然観察園や学校ビオトープでの継続的な植物や昆虫、また小動物の観察や生態についての記録作成や調査といった活動、そしてアサガオやヘチマまたゴーヤなどの身近なつる植物によるいわゆる「緑のカーテン」作りと、その効果についての研究活動などの取り組みに繋がりが広がって発展していくことも考えられる。

このことは、自然に関わる直接経験や、教師そして友だちと共有する具体的な自然体験を通して、子どもが自分自身を見つめ人と関わり、様々な経験を重ねて自分自身に、そして自分の身近な自然や人また社会に興味関心を持ち、そしてまた一人ひとりが主体的で対話的な深い学びの端緒を年齢に応じて得ながら家庭や地域社会、学校などにおいて自分自身の生活を充実させていくことに繋がっていくといえる。

小学校学習指導要領解説 生活編では、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う。」⁹⁾と、述べられていて教科の目標としてまとめられている。また、教科「生活」の内容については、合計9つの各内容が挙げられているが、その内の計3つが自然との関わり

や飼育栽培活動となっていて、保育内容「環境」の内容と全く同じ比率となっているのである。つまり全体の3分の1の比率であり、他の内容と比較して明らかに大きな部分を全体の中で占めているのである。そのことから保育内容「環境」と、小学校で1年生と2年生が学ぶ教科である「生活」の関連と繋がりが分かる。

したがって、自然と触れ合い親しむ様々な活動を通して「生きる力の基礎」を育み、そして培い伸ばしていくことが、幼児期から学童期にしっかりと橋渡しされ、さらに「自立への基礎」に繋がっていくことになるといえる。

5. 保育内容 領域「環境」の教授及び指導の課題等について

[1] 学生の自然体験の少なさと課題

保育者は、園で幼児組の担任になれば必ずといって良いが飼育栽培を保育の内容に盛り込むことを、年間指導計画での大まかな見通しや骨格となる活動を初めとして、中期や短期の指導計画の中ではより具体的な形で取り上げて位置づけ、そして日々の保育実践、教育実践に繋げていくことが一般的である。その際、保育室の内外に子どもたちが飼育栽培に興味や関心を持てるように、環境の構成や設定に腐心してあれこれと工夫し凝らし、子どもの様子や反応を把握しながら再構成を繰り返し行なうことが、保育者に求められる最も必要かつ重要な保育実践活動であるといえる。

そのためには、保育者が草花や野菜などの栽培物や、飼育小動物や昆虫などの、いわゆる子どもの身近にいる小さな生き物について、名前や生態を知り幼稚園や保育所、認定こども園での栽培や飼育の実践を学んでおくことが必要であるといえる。

しかし、保育者の自然体験や自然遊びの脆弱化や貧弱化にストレートに繋がると考えられる保育を学ぶ学生の自然体験の危機的な貧弱化が、本学の学生にも見受けられる状況がある。例えば自然とその生態系に少しでも興味関心を持てるようにと願い、担当する「生活Ⅰ」の授業の中で保育園や幼稚園における飼育栽培の実践について、飼育ケースに入ったオカダンゴムシ（通称：マルムシ）を紹介、説明した際の学生の最初のリアクションが、「きゃ～！虫は嫌い！」との叫び声？！である。保育学科に在籍して保育を学ぶ学生であるわけで

あるから、幼児や小学校の児童が色々な虫や小動物、例えばカブトムシやカタツムリ、カエルやザリガニ等々に興味関心を示し、それ故に実際の保育の場である園で飼育することも多いということを理解しているはずであるのだが、小さな虫に対してそのような拒否的な声を上げ拒絶的な反応を見せる学生も多いのが現状なのである。保育を学ぶ学生として、子どもの興味関心の対象であり、好きな子どもも多い中で小さな虫に対するそのような反応は心構えとして如何か、ということも表層的な捉えをすれば問題点であり課題であるといえるが、本質的な問題として学生の自然体験の少なさがあると考えられる。つまり保育、教育の中で、子どもに自然と触れ合い親しみを持つことを指導し援助する保育者の卵である学生の自然体験の少なさや貧弱さ、またその質の低さ等が問題として根本にあると考えられる。

[2] 自然体験についての質問紙調査から

今年度、2017年7月に実施した本学の保育学科1年生への自然体験に関する質問紙調査については表1のような結果となった。

◆自然体験についての質問紙調査結果（表1）

質問項目（選択・回答する全10項目）	回答人数
1. 木の実や果実、野草を採って食べた	4
2. 日の出や日の入りを見た	0
3. 飼育活動や栽培活動に取り組んだ	49
4. わき水を飲んだ	0
5. 海や川で泳いだ	9
6. 自分の身長より高い木に登った	3
7. チョウやトンボ、テントウムシなどを捕まえた	13
8. ツツジやサルビアの花の蜜を吸った	4
9. 草花を使ってままごと遊びをした	3
10. 草花で冠や花輪、舟や草笛を作った	11

○概要：保育者として経験しておくことが必要であり大切であると考え自然体験を10の選択項目から1つ選び回答する

○実施時期：2017年7月

○対象：保育学科1年生96名 回答率100%

この質問紙調査において保育内容領域「環境」と最も密接に関わると考えられる項目は、もちろん、「3. 飼育活動や栽培活動に取り組んだこと」で

あるが、96名中49名の学生がその自然体験活動、つまり飼育活動や栽培活動に取り組んだ体験を保育者にとって最も大切であると選択した、という結果となっている。これは本学の保育学科の1年生のうち約51%の学生、つまり半数を超える学生が選択したということになり、この結果は大いに着目に値すると考える。飼育栽培活動については保育内容領域「環境」において、ねらいが3つ挙げられている中で、その最初に「自然と触れ合う中で様々な事象に興味関心を持つ。」と、述べられている。つまり自然との触れ合いが、ねらいの最初に挙げられていること、そして内容については、4つの項目で自然環境及び飼育栽培に関する記述があることは前述した通りである。また飼育栽培活動は、ほとんどといって良いほど多くの園で、日常的に行われていることも前述の通りである。

具体的な日々の飼育栽培活動の中で、保育者が子どもと活動を共にしながら子どもの共同作業や援助者としての役割を十分に果たすためには、まず保育者自身が飼育栽培活動の楽しさや面白さをよく理解し、その留意点や醍醐味などを体験的に学んでいることが必要であるといえる。その点から捉えて考えると、保育学生がこの質問紙調査において、項目3.の飼育活動や栽培活動に取り組んだ体験を、保育者にとって最も大切であると選択していることは、的を得た、かつ妥当な選択といえるのではないかと考える。

そして、項目の7.については、96名中13名の学生（全体の約14%）が、チョウやトンボ、テントウムシなどを捕まえたことを、保育者の自然体験、経験として大切であると回答し飼育栽培活動の次に重視している。

これは、小学校学習指導要領解説生活編で、「近年、児童を取り巻く社会や自然の環境が大きく変化してきている。その結果、自然に直接触れる経験が極めて乏しくなっていることや、生命の尊さを実感できていない児童がいるという状況が生まれてきている。」¹⁰⁾と、述べられていることとも関連し繋がっていると考えられる。すなわち子どものそういった状況を改善する為には、何より自然体験とその中で直接経験として得られるチョウやトンボ、テントウムシ等々の小さな生命との触れ合いがとても大切であり、それは保育者も同様であるといえる。そしてそれ故に、保育者がそ

の様な経験を具体的な自然体験の中で直接的に積み重ねていることが求められるのである。その点について、項目の7. の選択及び回答数から考えてみると、本学の保育学生はある程度理解しているように考えられる。つまり生命の尊さや、儚さなどを実感させてくれることに繋がる小さな生命との触れ合いを直接的に経験する事を重く視て、保育者として自然の中で体験している必要性を認識していると考えられる。

さらに項目の10. については、96名中11名の学生(全体の約11%)が、草花で冠や花輪、舟や草笛を作ったことの体験を、保育者の自然体験、経験として大切であると回答し、上位から3番目に重視している。このような遊びや活動は、いわゆる伝承的な遊びであり、保育者から子どもたちへ、母親から子どもへという様に伝えられ繋がっていく遊びであるといえる。従って自然発生的には生まれたり、取り組まれたりすることが少ない遊びや活動であり、また自然環境との接点がある程度多くないと比較的難しい遊びであるといえる。

保育者として、また保育学生としてこのような自然遊びの範疇の伝承的な遊びを豊かに経験していることは、保育、教育の実践の場において子どもと自然環境を繋げ、その中での遊びを促し援助していくいわばファシリテーターとしての役割と機能を果して行く上で、活動の幅が拡がり子どもに対する自然遊びの援助や指導、そして子どもとの生活の中での自然との触れ合いにおける視点や関わり方の豊かさにも繋がり、その点においても大切に貴重な経験ということが出来る。

[3] 考察

以上のように自然体験についての質問紙調査からは、まず第1に飼育栽培活動を保育学生が最も重視していることが判り、次いで昆虫等の小さな生命との触れ合いを挙げ、さらに次いで伝承的な自然遊びを学生が重視していることが判った。これらは、保育内容領域「環境」の内容の中においても、また小学校学習指導要領解説 生活編の中においても、幼児や学童の大切な自然体験として重視されている内容とも関わり密接に繋がりが有るといえる。したがって保育学生が捉えている自然体験の重要性と保育、幼児教育の実践の場である園での自然体験の重要性またさらには小学校での

自然体験の重要性の捉えについての共通項が明らかになったといえる。そしてまた、その中でもとりわけ飼育栽培活動についての重要性の確認が改めてできたのではないかと考える

[4] 飼育栽培活動についての質問紙調査から

本学の保育学科1年生に飼育栽培活動に関する質問紙調査を2017年7月に実施した。その結果については表2のようになった。

この質問紙調査では、保育内容 領域「環境」の内容の、「(5) 身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」と、直接的に関わる飼育栽培活動全般について学生に尋ねている。つまり取り組む際の子どもに対する教授及び指導についての具体的な配慮や留意点を初め、指導案や実際の活動の進め方等について尋ねたものとなっているのである。

◆飼育栽培活動についての質問紙調査結果(表2)

回答数が多かった項目(10項目中)	回答人数
1. 子ども一人ひとりが飼育栽培活動に進んで楽しく取り組めるような援助や配慮	37
2. 年齢に応じた飼育栽培活動のねらい	17
3. 飼育栽培活動で使用する道具や必要な物の準備や実際の使い方	13
4. 飼育栽培活動がなぜ必要か、その意義や目的の理解。	10
5. 飼育栽培活動の子どもへの援助や配慮の要点	8

(※回答数の上位5項目を抜粋)

○概要：飼育栽培活動で最も大切であると考えることを全10項目の中から1つ選択する

○実施時期：2017年7月

○対象：保育学科1年生96名 回答率100%

まず96名中37名の学生が、「1. 子ども一人ひとりが飼育栽培活動に進んで楽しく取り組めるような援助や配慮」を、飼育栽培活動において最も大切であると選択している。これは保育学科の1年生のうち約39%の学生が選択したことになる。飼育栽培活動は、保育内容・領域「環境」においてねらいの最初に、「自然と触れ合う中で様々な事象に興味関心を持つ。」と、述べられていること、また内容については、4つの項目で自然環境、及び飼育栽培に関する記述があり重視されていること

は、前述の通りである。

その中で具体的な子どもに対する援助や配慮を最も大切であると回答した学生が多いことは、飼育栽培活動は、園や小学校における独自の活動であり家庭や地域では経験できない自然体験であり集団活動であるので、クラスやグループの中の一人ひとりの幼児や学童が主体的に進んで、かつ楽しく活動に参加し取り組むことが大切であり、その為の援助や配慮を行うことが必然的に保育者や教師の飼育栽培活動の取り組みの中で求められることを、学生もよく把握しているのではないかと考えられる。その際にはもちろん保育者や教師が子どものモデルや手本となることも多くの場面であるので、基本的な飼育小動物や栽培物への関わり方における配慮は保育者も教師も心得ておくことが必要といえる。とりわけ幼児は保育者を模倣することで、実際の関わり方を習得することも年齢的な特性の一つとして挙げられるので、植物にも小動物にも優しさと愛情をもって関わる姿勢を一貫して保ち、小動物や草花に向き合って、「御飯をたくさん食べて、うんと大きくなってね。」とか、「お水を一杯飲んで、たくさん綺麗な花を咲かせてね。」などと、心の交流にも繋がっていくような言葉かけを自然な形で頻繁に行なうことで子どもへの教授、及び指導や啓発を随伴的に進めるようにすることも必要な配慮であると考ええる。

そして次に選択した人数が多かったのが「2. 年齢に応じた飼育栽培活動のねらい」である。このことについては、96名中17名の学生（全体の約18%）が、飼育栽培活動の中で大切であると回答し2番目に重要視している。これは、保育指導案の一つとして飼育栽培の指導計画を作成する際にも重要な視点となるが、各年齢に応じた具体的なねらいを設定することが肝要となる。実際的には、各園の飼育栽培の実情に応じたねらいを考え設定することになるが要点として保育指導計画と同じく全体的な飼育栽培計画が基盤となり基本となっており、その上で具体的な年間計画のねらいや、期間や月そして週のねらいの順に、系統だって捉えて各段階のねらいを年齢に応じて考案し設定することが挙げられる。

園での実際の飼育栽培活動の全体的な計画を参照することにより見えてくる部分も多いと考えられるし、また実際に保育、教育する子どもの現状

に即して設定することが基本であるので、その点から考えても保育学生にはイメージしづらいといえる。それ故にいわゆる現場に実際に入ってから課題の一つであると考えられるが、保育専門誌の指導案のサンプルから読み取ったり、短大OGの現役保育者の来校時に質問したり、などして実際の現場における実際のねらいの一端を捉えつかむことは可能であると考ええる。

さらに「3. 飼育栽培活動で使用する道具や必要な物の準備や実際の使い方」については、96名中13名の学生（全体の約14%）が選択して回答し、人数では上位から3番目に多くなっている。これも前述のねらいと同様に具体的な実物が目の前にない為保育学生には明確にイメージすることが難しいといえ、それ故にこれもいわゆる現場に出からの課題の一つであるといえる。飼育栽培活動についての指導案から名称等を読み取って、各自でどのような用具や道具が実際に必要とされるのか、活動のどの場面で、どういう使い方をするのか等について自主研究課題として取り組むことも、意義のある有効な一つの方法として考えられる。

そして、選択した人数が次に多い「4. 飼育栽培活動がなぜ必要か、その意義や目的の理解。」については、96名中10名の学生（全体の約10%）が選択したという結果になった。子どもたちへの教授及び指導をより充実する為に、また再確認する為にも保育所保育指針と、幼稚園教育要領、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領をよく読み込んで、理解を深めていくことが肝要であるといえる。そしてさらに小学校学習指導要領解説生活編も十分に読み込んで、理解をより深め拡げることが求められる。何故なら、「自然に直接触れる体験や動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることを重視するなど、自然の素晴らしさや生命の尊さを実感する指導の充実に配慮する。」¹¹⁾ことが、保育者や教師には強く求められているからである。

そしてまた、選択した人数が次に多い「5. 飼育栽培活動の子どもへの援助や配慮の要点。」については8名の学生が選択し全体の約8%という結果となった。この項目は保育学科1年生の約39%の学生にあたる37名の学生が選択した、「1. 子ども一人ひとりが飼育栽培活動に進んで楽しく取り組めるような援助や配慮」と共通しかつ重複している

部分が多くあるといえる。従って共通部分は一括して捉えて、特に基本的な飼育小動物や栽培物への関わり方における配慮については保育者も教師もよく心得ておくことを共通の要点とすることが大切であるといえる。

[5] 考察

以上のように飼育栽培活動についての質問紙調査の結果から、学生が飼育栽培活動における子どもへの配慮や援助について最も重視していることがまず明らかになった。このことについては、園での飼育栽培活動の実際の取り組みにおいて自然と子どもの親しみのある触れ合いから始まる出会いをより良好なものとする為に、そしてその出会いを通して主体的、対話的な深い学びを子どもに可能な限り保障する為に、保育者や教師が大切にしなければならない最も重要と考えられる要点であるといえる。

そして目的や意義、ねらいなどについては、保育所保育指針や幼稚園教育要領、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領や小学校学習指導要領解説 生活編も十分によく読み込んで理解をより深め掘ることが基本的に求められることである。そしてまた関連する資料や文献、さらに保育、教育現場で作成され、飼育栽培活動の実践に使われている全体的な計画や、より具体的な指導計画などを参照することが求められる。その点については現場との連携が重要な要素になるといえる。それ故に保育者、教師の養成校と保育及び教育実践の場である各園とが、相互にもう一步踏み込んだ形で連携を深め、より質の高い保育者、教師を養成校と現場とが協力協働することを通して育成するということの意義を再認識し共有することが双方に求められていると考える。

6. 今後の課題と展望

保育内容 領域「環境」については、保育所保育指針と幼稚園教育要領、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても明確に示されているように、前提として幼児の発達の側面から示した指導の観点であるという捉え方であり、領域「環境」のねらいと内容に関わる飼育栽培活動についても、その他の幼児の活動や遊びについても同様である。つまり幼児の遊びや活動の指導は、例

えば自然遊びにおいても、領域「環境」の側面のみを取り上げて指導するというのではなく、自然遊びや自然に関わる活動の総合性に基づいて指導することが求められるのである。この点については、保育内容 領域「環境」の教授及び指導における重要な要点の1つであるので、保育者の卵である保育学生に詳細に説明を添えて教授し、そして指導や援助についての留意事項や配慮点も分かり易く伝えていくことが肝要であると考えられる。したがって今後の課題の一つとしたい

そして、保育内容 領域「環境」における具体的なねらいと内容の中で最も大きくかつ重要な位置を占めている幼児の飼育栽培活動における基本を再確認して整理することと併せて、そこから発展させていく遊びや諸活動を見直して捉え直し、その展開の方向性や深化の可能性を吟味し考察を加えて、飼育栽培活動についての学生に対するより充実した教授及び指導の内容に繋げていくことも今後の研究課題の一つとしたいと考える。

幼い乳幼児の頃から自然について、また身近な環境について直接的で具体的な体験や経験を重ねながら主体的に学び、かつ自然や環境について様々な角度から教授及び指導を享受しながら成長し育っていくことが、学童期や青年期以降における自然や環境についての、そしてさらに環境問題についての正しい認識や捉え方、また向き合い方や問題解決を志向した具体的な行動に繋がっていくと考えられる。そうであるならば、当然の事として乳幼児期の子どもが、園などで自然環境との触れ合いを通して直接体験する内容やいわゆる環境教育にも関わって、保育者や教師の果たす役割が重要となり、その責任や使命も重くかつ大きいものになるといえる。そしてさらには自然と人間の共存が現代社会における保育、教育の最先端のテーマになり、大きな流れとなり、一つの重要な課題となっている。それ故に保育者や教師のより一層の自覚と、保育者養成の教育課程における「環境教育」の位置づけが求められることに今後繋がっていくと考えられる。

保育者の卵である保育を学ぶ学生が、自然遊び経験の豊かさについての理解と、環境教育に直接的に結びつきその基礎となり土台となる保育、教育における自然遊びや飼育栽培活動の重要性についての理解とについては、学生に対して当事者意

識の大切さや必要性と、そして園で保育、教育を受ける子どもたちすなわち次世代に繋がっていくことの意義を理解しよく認識することの大切さを、担当する授業やセミナーにおいて繰り返し訴えることも課題の一つと考えたい。

文部科学省が小学校低学年の教科である「生活科」の学習内容を保育所や幼稚園、そして認定こども園の保育内容に加えることを検討すべき課題としているが、将来的にいわゆる「5歳児の義務教育化」に伴う形で実施されることになるのではないかと予想される。

日々、自然との触れ合いのある生活、自然と親しむことができる生活、すなわち自然体験を日常的に重ねることができる生活は、その中で子どもたちが主体的に生きる力の基礎を育くみ伸ばし、鍛えることができるからこそとても重要であるといえる。現代の日本社会における子どもたちの生活全般と、自然環境を初め子どもの身近な環境を考えると、益々そのことが子どもの健やかな成長発達に関する今日的な課題となって来ているといえる。

そのような状況の中において、保育者や教師をめざす学生には（財）日本生態系協会が認定する、「こども環境管理士資格」が参考になり、一つの示唆になりうると考える。

この資格は、「自然体験を通じて思いやりの心や命や物を大切にす豊かな感性」を、子どもたちが育むことができるようにサポートする専門家として認定される資格である。保育、幼児教育の場で近年特に注目を浴びている「環境教育」のスペシャリストとして、「子どもと自然をつなげる環境づくり」を実践的に担うことに期待が集まっている。この資格の保育を学ぶ学生への周知と啓発を通して子どもにとっての自然環境の大切さと、そして自然体験の重要性をさらに伝えていくことを今後の課題の一つとしたいと考える。

引用文献

- 1) 厚生労働省 編「保育所保育指針」フレーベル館 2017
- 2) 文部科学省 編「幼稚園教育要領」フレーベル館 2017
- 3) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 編「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」フレーベル館 2017
- 4) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 編「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館 2015 139頁

- 5) レイチェル・L.カーソン 著 上遠恵子 訳「センス・オブ・ワンダー」新潮社 1996
- 6) 文部科学省 生涯学習審議会（答申）「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」-「青少年の[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」1999
- 7) 国立青少年教育振興機構（報告書）「青少年の体験活動等に関する実態調査 平成 24 年度調査報告書」2014
- 8) 前出「幼稚園教育要領」18頁
- 9) 文部科学省 編「小学校学習指導要領解説 生活編」日本文教出版 2018 23頁
- 10) 同上 4頁
- 11) 同上 5頁

参考文献

- 1) 待井和江・福岡貞子 編著「保育実習・教育実習」ミネルヴァ書房 1997
- 2) 日本生態系協会 著「環境を守る最新知識」信山社 1998
- 3) 田尻由美子・無藤 隆 編著「保育内容 子どもと環境」ミネルヴァ書房 2006
- 4) 無藤 隆 監修 福元真由美 編「保育内容 環境」萌文書林 2007
- 5) 小田豊・湯川秀樹 編「保育内容 環境」北大路書房 2009
- 6) 大澤 力 編著「自然が育む子どもと未来」フレーベル観 2009
- 7) 大橋喜美子・三宅茂夫 編著「子どもの環境から考える 保育内容」北大路書房 2009
- 8) 柴崎正行・赤石元子 編著「保育内容 環境」光生館 2009
- 9) 柴崎正行 編著「保育内容 環境」建帛社 2009
- 10) 嶋崎博嗣・小櫃智子・照屋健太 編著「新・保育内容 シリーズ 環境」一藝社 2010
- 11) 田宮 編「領域 環境」萌文書林 2011
- 12) 神田伸生 編著「子どもの生活・環境・遊びに向き合う」萌文書林 2013
- 13) 上中 修 編著「保育内容 環境」保育研究社 2014

- 2017. 10. 9 受稿、2017. 10. 10 受理 -

**A Study on the Connection between Children's Life and Childcare Contents “Environment”
- From the life and play in infant's garden “Life course” is also in view -**

Hideki Hase

Shijonawate-gakuen Junior College

In this article, children are going day by day childcare centers and kindergartens spent with their friends and kindergartens, and certified children's garden

The activities such as life and play of infants were recaptured and the connection with the “childcare content area” environment was considered. Also, focusing on breeding cultivation activities in the garden, we examined the relationships and connections with the “environment” in the childcare content domain and examined them while also considering the living department. We also organized the necessity of emphasizing the natural environment as childcare workers, childcare, and items to be noted on children's relationship with nature in the practice of education. In addition, based on the results of the questionnaire survey on the nature experience of students studying childcare, we explored the better way of teaching and teaching students about the “environment” that leads to the department of life and the problems of lessons etc. As a result, it was confirmed that nature is regarded as the most important in the domain “environment”, and it was found that the breeding cultivation activity in the garden has become a meaningful effort leading to the child's healthy growth and development. The results of the questionnaire survey also revealed that students emphasize consideration and aid to children in breeding cultivation activities. And it turned out that the role of infants and children and their experiences directly experienced through contact with the natural environment and the role played by teachers and teachers in environmental education are important.

Key words: Childcare content “Environment”, life, play, breeding cultivation activity, living department, nature experience, Environmental education

